

秘められた物語

佐々木 晃

子どもたちが背負い、園にもち込んでくる様々な問題に向き合うにつけて、子どもたちをめぐる諸事情は、一層厳しくなった感じがします。また、近年は特に、親御さんの子育ての悩みや、ご自身の人格形成の課題にも、一緒に向かい合う機会も増えてきました。私自身も同世代の悩み多き

親なので、それはとてもよくわかります。しかしながら、一緒に育ち合っていていける連帯感と安心感が、私の保育を支えてくれています。ところで、このような背景をもつ子どもたちからこそ、あるいは、そのような子どもを送り出す親だから、なおのこと、遊びのもつ力の偉大さ



▲さあ、大工仕事の始まり

を痛感するこの頃です。この子どもの姿は遊びに没入する、遊び浸るといふ表現の方が適当なのかもしれません。

「森のレストラン」

中庭が影で暗くなるほど大きくなったカイヅカイブキは、保育者の間で考えに考えた挙げ句、防犯と採光という理由で先端を切り落としました。

上から光が差し込むようになった、その木の中を、子どもたちは見逃しませんでした。ままごとやホテルごっこを続ける子どもたちの「上履きのまま往き来したい」という願いが叶うように、年長組たちと保育者、武田のおじさんたちとで大工仕事を始めました。

テラスからつづくように、すのこ板の渡り廊下をつくったり、「トトロが入ってくるような窓を

つくりたい」というモカの発想で、カイヅカイブキの枝打ちをしたりしました。木の中は板張りにしました。

作業はまる三週間つづきました。「一方通行では火事の時逃げられない」「お客様がいつぱい来たらどうする」など、作業の過程でいろいろな暮らし方のイメージや構造の課題、工程の修正などが真剣に話し合われました。

まだ、床が張れたばかりの状態のとき、リコが「ねえ、今日のお弁当はここで食べよう」と提案しました。みんな喜んで賛成しました。中に入れない子どもたちは、周りにごさを敷いて、それを眺めながら弁当を食べました。

「ねえねえ、なんていう名前がいい？ この家」とリコが言うと、ユウキが「トトロの家はどう」と言います。すると、すぐにヒロキが「なん



▲真剣に話し合いながら進む作業



▲「森のレストラン」

だかお化け屋敷みたい」と言います。「森の家はどう」とモカが提案しましたが、「なんだかわたしのおうちみたい」とモリユウカが言って、皆肩を落としました。「だったら、やっぱり、森のレストランか」と、トモヤが言くと、皆「そうそう、お弁当食べているし」と、話が落着きました。

傍らで会話を聞いていた保育者が「森というイメージは、皆もっているんだなあ。そこは同じなんだなあ」と感心して言うと、リコが「先生、すうーって、息吸ってみてよ。ねっ、森の匂いがあるだろ」と目を閉じて深呼吸しました。周りの友達も同じように目を閉じて息を吸いました。「する、する。ああ気持ちいい」「食欲出るなあ」ヒロキとトモヤはおどけて、弁当をかき込んでいます。

「森のレストラン」ができあがると、年中児たちも、こっそり訪れるようになりました。草や木の葉を持ち込んで、葉っぱの皿に盛ったり、石でつぶしてご馳走にしたりしています。ある時は、リスやネズミの家族になったりして過ごしています。

ある日、年長児のモカとリコがカイヅカイブキの葉を石でつぶして粉状にしてみました。聞くと、「お抹茶にするの。新田先生がしてくれろでしよ」と言います。二人は、この粉を茶碗にいれて、泡立て器でしゃしゃか混ぜ、「うーん。いい香り」と嗅ぎ合っています。「先生も一服どうぞ」と保育者にも振る舞われた抹茶は、森のレストランのメニューに加まりました。

可能性を拓いていくような輝き

子どもたちはいろいろな人物や動物になって遊



▲年中児もこっそりやってきて……

ぶ中で、様々に自分を表現しています。表現しながら、自分の新たな側面に気付いたり、友達に教えられたりしていつています。ものをつくり、表現しながら、その実は自分自身をかたちづくっているかのようです。日常の生活や人間関係の中では表現しにくいようなものですら、遊びの中の役割や登場人物になると容易に表現できていることに驚かされます。子どものその表情には、自らの人格形成の可能性を拓いていくかのような輝きがあります。

遊びの生まれる出会い

人やもの、事象や文化など、様々な出会いを経た「森のレストラン」の遊びは生まれていることがわかります。最近、私がおぼろげながら感じ始めたことは、それぞれのもつ「生の物語」が豊か

であるほど、その出会いが意味深いということです。

数十年昔、私どもの園で、子どもと共に暮らした先輩の手で植え育てられてきた樹（カイヅカイブキ）。それを受け継ぎ、自分たちなりに守り育てようと努める人との園生活。それらの物語が今回のような遊びの現象を生み出したと言っても過言ではないでしょう。子どもたちが遊び浸る環境には、豊かな物語が秘められています。出会いによつて、それが紐解かれ、かわりの中で共に楽しみを分かち合っていきます。その楽しみは子どもを癒し育んでいくのでしょうか。子どもたちの喜びの姿を介して、過去と、保育の今が結ばれるとき、私ども保育者にあたたかな力がみなぎってきます。

(鳴門教育大学附属幼稚園)